



196回くらしの植物苑観察会 2015年7月25日(土)

-ウリとヒョウタンの文化史-

辻 誠一郎(東京大学大学院新領域創成科学研究科)

漢字でウリは瓜、ヒョウタンは瓢箪と書きます。漢字で書いた方が姿かたちをイメージしやすいのではないのでしょうか。ここでは日本語の普通名を分類学の決まりに則って、カタカナで表記することにします。注意しなくてはならないのは、ウリは俗っぽい呼び方で、ここでお話ししようとするキュウリ属のメロンという植物種だけを指すのではなく、カラスウリなど他の属のものまで単にウリとひとまとめにして呼んでいることがあるのです。ヒョウタンも植物種名としてはユウガオが用いられ、変種としてユウガオとヒョウタンに区別されたり、ときにはユウガオ仲間(類)とヒョウタン仲間(類)という呼び方がされたりして、地域によって、あるいは人々によってヒョウタンの内容が違っていることがあるのです。このような問題は民俗・民族学的にはたいへん興味深いことで、人と植物とのかかわりかたを解き明かすことになるのですが、いまはそこに興味があるわけではありません。ここではとりあえず近年の植物学の成果によって整理された植物名を指すことにしたいと思います。すなわち、ウリはキュウリ属の1種であるメロンを、ヒョウタンはユウガオ属の1種であるユウガオを指すことにします。メロンにはウリの名がつくシロウリやマクワウリなどが、ユウガオにはヒョウタンやセンナリヒョウタンなどといった変種が含まれるのです。

まえがきが長くなりますが、ウリ科は大きな分類群で、メロンを含むキュウリ属、ヒョウタンを含むユウガオ属のほかに、みなさんがよく知っているトウガン属、スイカ属、カボチャ属、ヘチマ属、ニガウリを含むツルレイシ属、ハヤトウリ属といったたくさんの栽培植物が含まれています。ウリとヒョウタン、すなわちメロンとユウガオはその代表格といえるでしょう。それら以外にもカラスウリ属などといった人とかかわりの深い植物が含まれているのです。

日本におけるメロンの出現は弥生時代にまでさかのぼります。メロン博士こと藤下典之さんは、日本各地の遺跡から見つかった種子から、本格的な水田稲作・畑作農耕が日本に伝播した弥生時代に日本に入ってきたことを明らかにしました。そのときはピンポン玉のような小さな果実をつけるザッソウメロンだったということも明らかにしたのです。古墳時代から古代にかけて急速に多様化し、シロウリやマクワウリの仲間が作られていったのです。おそらく、古墳時代、古代においても大陸から新たなメロンの仲間が伝えられたことでしょう。江戸時代になると西洋からマスクメロンなど大型の甘みが強いメロンが持ち込まれ、さらに多様化していった様子が当時の資料から明らかになっています。歴史的にみると、みなさんがメロンといっているものとは姿かたち、色なども大きく異なる多様なメロンがあったのです。



このようにみるとメロンは食用だけのようにみえますが、けっしてそうではありません。藤下さんが説かれるように、メロンは食物供養儀礼の原型の対象ともなったといえるのです。「現にマクワやザッソウメロンを仏壇に供える習慣が各地で見られる。新潟の新津市や村上市では、旧盆に禅宗の家では、コヒメウリを小型のナス、ヒメリンゴ、ホウズキやササゲなどと一緒に供える。コヒメウリは卓球の球大で白皮で甘く、盆の前日の朝市で売買される。(中略)岡山の前島では枕に似た形のザッソウメロンをお盆に供えているが、帰ってきた仏が寝やすいようにとの思いをこめたもので、さらに果実を海水につけてから供えると、海難事故がさけられるとも言う」と「海をわたった華花」の図録にも書いておられます。実に詳細に各地を歩き回って、人とのかかわりを調べられていたのです。

ヒョウタン、すなわちユウガオに話を進めましょう。不思議なことですが、メロンと同様にヒョウタンが発見されたのは遺跡以外にはないのです。滋賀県の粟津湖底遺跡、これは縄文時代早期の約1万年も前の遺跡です。その植物塚から種子と果実が発見されたのです。有名な青森県の三内丸山遺跡、そこでは縄文前期の約6千年前の盛り土から種子が発見されました。熊本県の曾畑遺跡の約6千年前からほぼ完全な形のヒョウタンの果実が発見されています。その姿かたちは西洋ナシのようで、中央がくびれたものではありません。これを見ればヒョウタンだと気付かないかもしれません。アフリカが原産のヒョウタンすなわちユウガオは、1万年前の日本にすでに伝わっていたのです。残念ながら、インドでも中国でもこんなに古い記録はないので、どのようにして日本に伝わったのかはわかりません。

縄文時代のヒョウタンは食用だったのでしょうか。それとも祭祀儀礼に使われたのでしょうか。弥生時代から中世にかけてのヒョウタンも遺跡からしか見つかりません。とくに古代では球形に近い姿かたちの果実が見つかっていて、しかも祭祀遺構からが圧倒的に多いのです。長野県の更埴条理・屋代遺跡群からは杓として発見されています。山口県の長登鉾山遺跡では祭祀遺構から7個のヒョウタン果実が並んでいたことがわかっています。願い事を叶える七つ星を意味すると考えられます。

ヒョウタンには福をもたらす大きなパワーがあると信じられてきました。果実の中の種子が乾燥するとジャラジャラと音を立てることから、振れば大金がもたらされるとか、種子が多いことから子宝に恵まれるとか、さまざまな言い伝えがあります。養老の滝伝説では、ヒョウタンから泉のように水(酒)が湧き出してくると考えられてきたのです。ちなみに、みなさんがこれはヒョウタンと思っておられる「くびれたヒョウタン」は、中世以降でしか確認されていません。ヒョウタンも実は多様な世界があったのです。

ウリとヒョウタン、すなわちメロンとユウガオの多様な世界の歴史を垣間見てみることにしましょう。

.....

次回予告 第197回くらしの植物苑観察会 2015年8月22日(土)
「朝顔の系統保存の歴史」 仁田坂 英二(九州大学大学院)
10:00~12:00(予定) 苑内休憩所集合 申込不要